

子どもの『できた!』を 引き出すためにできること

神奈川県立保健福祉大学 リハビリテーション学科 学科長・教授 笹田 哲

お手伝いにチャレンジすることは、最初はうまくいかないことが多いため、すぐにあきらめないことです。「ちゃんと、しっかり!」と気合いを入れすぎたり、「まだもっと!」「まだできていない!」と、失敗だけを指摘しないように心がけてください。子どもにとって「させられ体験」にならないようにしましょう。上から目線の鬼コーチではなく、子どものサポーターになってあげましょう。完璧にやることが目標ではありません。訓練にならないように、「小さなできた!」をモットーにして関わっていくとよいでしょう。お手伝いを通して、子どもはバランス感覚を養ったり、指先の機能を高めたり、力加減を調整することが身についていきます。これらの能力は、後のライフスキルの獲得にも繋がっていきます。「〇〇ができるようになったね」や「お母さん、うれしかったよ、ありがとう」などと具体的に何ができたことがよかったのか、子どもにはっきり伝えていくことが大切です。また、できた時には、王冠シールなどを貼って、できたことをみえる化することも、長続きさせるコツです。さあ、明日から「小さなできた!」をめざして、一緒にトライしましょう!

神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 リハビリテーション学科 学科長・教授。作業療法士。明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻修士(心理学)、広島大学大学院医学系研究科修士(保健学)。作業療法と学校・園の連携を研究テーマとし、これまで作業療法士として学校・園を数多く訪問して、発達が気になる子どもたちの支援に取り組んできた。NHK 特別支援教育番組『ストレッチマン・ゴールド』番組企画委員も務める。著書多数。

